

# アフリカの人々と名付け 14

## 「去勢牛名」の意味するもの——

### 類的存在としての成熟と自制

小馬 徹

キブシギス人は、様々な価値の中心を牛に置く「牛複合」(cattle complex)文化を生きて来た。そして、キブシギスの男性には、自分の最愛の去勢牛に因む「牛名」(ox-name)こそが自己を強く主張できる名前だった。そのためか、名前による個の差異化を厳しく抑圧する文化装置も、「牛名」に関してだけは緩やかにしか働いていないと思われる。

しかし、キブシギスのような平等制社会は、個の差異化を抑止し、権力の偏在化を阻むことで初めて維持できるのだから、「牛名」も結局はこのシステムの支配を免れない。既に見たとおり、「牛名」は、元になった詩を短縮して作られる。だから、必然的に類化される側面を持つが、それだけでは不十分だ。では、「牛名」の個の差異化作用は、他に一体どんな仕方で抑止されていたのだろうか。

#### ディンカの個人名と「牛名」

ここで思い出すのが、スーダンに住む西ナイル語系のディンカ人やヌエル人という、人類学史上有名な牛牧民たちである。

キブシギス人は今でも「牛複合」文化を維持しているものの、既に生活の万端を牛に依存する暮らしが失われて久しい。また、「牛名」は既に過去のものになりつつある。これに反して、ディンカやヌエルは、今でも強く牛に依存する伝統的な生き方を維持している。

ディンカでは、誕生の時点で与えられる個人名は、牛の身体の基本的な色模様に関っている。この際選ばれる色模様は、彼が生まれるようにと、過去に供犠された牛の色模様である事が多い。この名付けは、その牛に対

する一種の償いであると思われる事がある。そして、誰も、自分の名前の出所となった色模様の牛を食べる事はできない[Lienhardt, G., *Divinity and Experience*, 1961]。

ディンカの若者は、自分の最愛の去勢牛の様々な色模様に因む「牛名」をイニシエーションの時に名乗り、これを媒介にその牛と自分を同一視する。これ以降、彼の年齢組の者や親しい友人は、彼をこの「牛名」で呼ぶようになる。この牛は、彼が娘たちの前で誇らし気に見せびらかす去勢牛だ。そして、彼は戦いや狩りで槍を投げる時、あるいはダンスや結婚式の時に「牛名」を高らかに叫ぶ。

#### 「牛名」と自然、社会

ディンカの男性は、この去勢牛の色模様が呼び起こす様々な連想を読み込んだ、長く繰り返しの多い自作の詩を朗唱してこの牛を讃える。詩の各部で歌われているのが人か牛か容易に判断がつかないほど、彼の人生と牛の生活は渾然一体をなしている。

例えば、黒い「見せびらかしの去勢牛」(あるいは「詩の牛」)を持つ人物は、毛並みの黒さと暗さから連想される諸々のものを詩に読み込み、それらから作られた幾つもの「牛名」で知られるようになる。それらの「牛名」は、「木陰」、蝸牛をあさる黒朱鷺に因む「蝸牛をあさる」、野牛が潜む森の暗さに因む「野牛の茂み」、春の早魃に印象的な声で鳴く小鳥に因む「春の早魃の時に大声で叫ぶ」、会合中の人たちを物陰へと駆け出させる土砂降り雨を呼ぶ黒雲に因む「会合を台無しにする」、などの名前である。

色彩と明度に関するディンカ人の牛と自然の認知が相互に依存し合っており、彼らがそれらの連想を通して牛を自然的、社会的環境に結び付けようと意図的に努めている事を「牛名」が示している。彼は、こうして、歌や挨拶の中で自分の最愛の去勢牛の色模様によって象徴される森羅万象と結び付けられ、讃えられるのだ[Lienhardt, G., *ibid.*]。

### 「牛名」と系譜の記憶

ところがこの「牛名」は、ディンカ人の自己評価において重要でありながら、系譜を辿る際にはほとんど用いられない。リーンハートは、豊かな連想のゆえに謎めいた詩や「牛名」の意味が後世の者には判らなくなってしまうと言い、それが一因であると推測する。だが、それ以上に重要な原因は、「牛名」が系譜上の親子関係や権利義務関係を記述しない事だと述べている[Lienhardt, G., "Social and Cultural Implications of Some African Personal Names", *JASO* 2, 1988]。

ディンカ人とごく近縁の南スーダンのヌエル人の間では、「牛名」は主に同じ年齢組員同士で用いられる。だが、年齢の違う者は擬制的な親子として、互いに親族名称で呼び合わなければならない。そして、「牛名」は死後間もなく忘れ去られ、ディンカと同様に、系譜上の記憶には残らないと言う[Evans-Pritchard, E. E., "Nuer Modes of Address", *The Uganda Journal*, 12(2), 1948]。

ただしキプシギスでは、他の全ての名前と同様、「牛名」は成人男性の正式名である父称の中に組み込まれ得る。この点で、キプシギスの場合、ディンカやヌエルに比べて「牛名」への文化的規制が緩やかだと言えよう。

### 去勢牛と雄牛

ここで指摘できるのは、「牛名」の由来がこれらの牛牧民では例外なく、雄牛ではなく、去勢牛に求められている事実である。

ディンカ人は、言語的に去勢牛と同一視して自分を誇示するが、これは主に審美的な関心による。ところが、男らしさと性的な豊穡さは雄牛が代表すると考えている。それにも関わらず、お気に入りの色模様をもつ雄の子牛が生まれた場合、大抵は去勢して「見せびらかしの牛」にする。だから、ディンカの牛群には、生殖に無縁の、過剰な数の見せびらかし用の去勢牛が含まれている[Lienhardt, G., *Divinity and Experience*, 1961]。

この辺りの事情は、ヌエルでもキプシギスでも変わりがなかった。雄の子牛をほとんど全部去勢しないと雌牛は落ち着きをなくし、牛囲いの中では争いが絶えず、牛舎は騒然となるとヌエル人は考える。その一方、群が違えば雄牛同士の喧嘩が鼓舞され、その喧嘩が元でリネージが分裂したと伝承されている。

ヌエル人は牛をめぐる安易に、且つ頻繁に争い合う。そして、人間を破滅させるのも牛だと言う。母親を人間に殺された雌牛が人間と一緒に住み、借財や婚資をめぐる果てし無い抗争を引き起こして復讐しようとしていると、彼らの伝承は語っている[Evans-Pritchard, *The Nuer*, 1940]。キプシギスにも、よく似た伝承と観念が存在している。

キプシギス人の男性は、ディンカ人やヌエル人と同様に、自分を雄牛ではなく去勢牛に準えて、審美的な満足を得た。それは、去勢牛が雄牛のように個の差別化を追求する事を奨励される存在ではないからだろう。雄の子牛のほとんどが去勢される事で、群は秩序と平和を確保する。雄牛は仮に男性性の理想ではあっても、現実には社会性を欠く。牛群には僅かに雄牛がいるが、キプシギスの平等社会には「雄牛」がいてはならないのだ。

「牛名」は、「去勢牛名」であって「雄牛名」ではない。「牛名」は、既に個化への自己抑制を組み込んで形造られた名前だと言えよう。

(こんま とおる 神奈川大学社会人類学)